

# 『ジョン・ダン入門』

## — 背信と野心の詩人 —

ジョン・ケアリ著

朝倉秀之訳

### 第二章 背信の技法

十六世紀後半に英国カトリック教徒が抱いた悲痛な嘆きは今や忘却のかたにある。時代が下した冷酷な策略の一つによつて、事实上、文学者たちが宗教を異にするあの共同体の苦悩から探り当てる事と言えば、その同信の者が持つ苦しみを共有することが出来なかつた若者の詩以外にはない。その若者の背信はただその技法の領域の中でのみ問題となる。それゆえ私たちは背信が若者の詩に影響を及ぼしたのかどうかを考え、一つひとつの詩の深みにその戦きが聞こえないかと耳を澄ます。それらの詩は彼がローマ・カトリックの教えを裏切つたことやそれが培つた苦悩にどれほどの影響を受けていたのであろうか。その疑問を心に抱きながら『ソングズ・アンド・ソネット』に当たつてみると、私たちの関心を引く特徴は貞節と不実についての際限のない苦悩ということになる。

一五九〇年代の他の若い詩人たちは、一般的に自分たちのソネットの中で女性の危うさと残酷さについて不平を述べている。彼らは

致命的と言つてもいいほどに冷淡な心を持つた残忍な女に惚れやすい。一二度ダンはこの受けのよい形態を自分で採用してはいるが、大抵の場合、彼が選んで心に描く苦悩は全く異なっている。ダンの難解さは、ベッドに恋人を誘うことではなくて、むしろその後の彼女の貞節を確かめることにあるらしい。時々彼はこのことについて呑気な振りをして、自分が女性のように不実であるとか、貞節を望まないなどと自己弁護の宣言をしたりする。時には彼が涙にくれて悲しくなり、残忍な女性の裏切りが粉々にしてしまうような小つぼけで壊れやすいものに自分を同化させたりする。「ああ、信仰を投げ捨てた彼女なら、すぐにもお前をも粉々にするだろう」と彼は『贈られた黒玉の指輪』<sup>(1)</sup>の中で自分の指にある小さくて黒い安つばい飾りに向かって庇うように囁く。時として彼は、二人の愛は持続し、二人の魂は一つになる、と歌つて恋人を安心させたりする。しかし、恐怖は消え去らないまま、その安心そのものを必要とする。歡喜の背後に、どこにも「貞節でうつくしい女はいない」<sup>(2)</sup>という懷疑が存在する。一恋愛詩人としてのダンの全作品は、この辛辣な認識を耐え忍んで乗り越える一方法であると見ることが出来る。彼がた

とえそれを皮肉な無頓着さを装って見せびらかせようと、激昂して悶え苦しもうと、あるいは恋人の腕の中に見いだす自分の亡霊からの至福の解放を祝おうと、その離別と消失の暗い側面が彼の不安な性の認識の根源なのである。

この問題で、恋愛詩は人間関係の永続性について、特に、堅固な愛情を引きつけたり、それに報いるための彼自身の技量についての根深い不安を明らかにする。恋愛詩は不変性にこだわっている。たとえ彼の背信を知らなくても、私たちはその不変性を彼の個人的な生活の中のある重要な欠陥のせいだと言いたくなる。表面に出ていると思われることは、ダンが詩という空想の世界で、自分の不信を女性に移し変えることや自分が功德として見られる呪いの言葉を女性に投げ掛けることでそこから抜け出していることである。このように、彼は心を癒すという真実の曲解を利用する。真実の曲解があるから、虚構はいつも創作者たちに報いるのである。実生活では裏切りが属していた宗教の領域から、詩の中で、その裏切りの主題を取り除き、またそれを比較的毒の無い性道德の分野に移し変えているのは、正にその策略の付加的部分である。

恋愛詩の中で、この仮面が削げ落ちたり、宗教的忘我が透けて見えたりする瞬間が幾度となくある。時々あまりに微かで、私たちはそれが本当に起こっているのかどうか全くわからない。例えば、『流れ星を拾いにゆけ』の歌は、「貞節でうつくしい」女性がいることを否定しているが、簡潔に望みを抱く、

そんな女を見つけたら、知らせてくれ  
 そういふ聖地巡礼も楽しいもの<sup>(3)</sup>。

「聖地巡礼」の詩的效果は抜群である。この言葉は喜びのあまり泣いてしまうように、その詩行を安堵させる。そして十六世紀後半で全く中性的に使われているが、その言葉は同様にカトリックの教えを内包している。ダンの精神は、一瞬、子供時代の信仰と確信の世界に逆戻りしていったのか、そしてその言葉の感情に訴える迫力を説明しているのか。とにかくダン自身が裏切りの及ばない状態を想像できるとき、性ではなく聖なるものに関連する言葉を選択することに私たちは気づく。そしてこのことは恋愛詩が宗教的不安の原因の隠れ蓑であることを提示している。

ほとんど隠れ蓑にさえならない時もある。ダンが挑発しているかのごとく、自分自身の状態に辛辣なほどに適切である宗教的言葉を振り回しているのを見いだす。

たとえ、きみの手と信仰、それに善き業が

全く取返しつかないきみの愛を保証しているとしても

確かにきみはあの背信である転びをするとしても、

きみの愛を固めるがいい。だが大いにぼくはきみを恐れる。<sup>(4)</sup>

『変化』から引用するこれらの詩行の中でのダンの空威張りは、苦痛で怒り狂う言葉を卑猥さで和らげる形式をとっている。「信仰」と「善き業」はカトリックとプロテスタントの間で論じられる正当性についての議論で重要な用語であった。しかしながら、ダンが言及している「善き業」は性的な意味で、信仰は世俗的な意味である。恋人は仰向けになり、足を開くという単純に物理的意味で「転ぶ」覚悟がある。彼女の「背信」は貞節を試すことになる。それが反対の意味になるまでその言葉を玩ぶことで、背信の詩人はそれを無力にする。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

『変化』はエレジイの一つであり、ダンの詩の制作年月日は大部分想像になるのだが、私たちは少なくともそれらのエレジイは初期に書かれたと確信してる。すなわちダンがカトリックを否認する決心と同じ生涯の時期に属しているからである。私たちはダンがエレジイの中で重要な言葉を不愉快な気持ちで中性化しようと奮闘しているのを見つけては驚くにあたらない。『腕輪』というエレジイは他の例を提供する。<sup>(5)</sup>この詩の中でダンは恋人の持物である金の鎖を紛失して、十二の金貨を提供することに同意する。その結果、金細工師がそれらを溶かして新しい鎖を作ることができる。エリザベス朝時代の人々に「エンジェル」として知られた貨幣を選ぶことで、ダンは自分の詩に宗教的諷刺の語呂合せをする位相を嵌め込む。その諷刺は、主要とはいえずに有力になった題材によっては正当化されない。詩の軽薄な効力が発揮されるのはこの微妙な位相に掛かっているのである。

これらの罪なき十二人のエンジェルが、きみの無慈悲な判決（ひどい裁判官だ）を受けて、ぼくの罪の大きな重荷を負わなければならぬのか。

地獄に落とされ、炉に投げ込まれ

天使自身が犯したのではない罪のために罰せられるのか。：

しかし、きみは揺るがない。きみの御心が成就するように。

とは言え、聖母マリアが貪欲な墓に我が一人息子を

横たえるような苦渋に満ちて

ぼくはこの殉教者たちを裏切つて火刑台につける。

永遠の罰を受ける罪、地獄の火、殉教者の裏切りそして詩人の罪の

「大きな重荷」は、私たちが通常愛のエレジイで期待する題材ではない。しかしダンが書いていた時代の自分自身の苦境を知るとき、それらが告白そのものであると言つていいものだということが分る。自分が罪のない苦しみの原因であるという感情、そして明らかに殉教という状況の中で母親と死んだ息子を恣意的に登場させていることは、ダンの家族の歴史と弟ヘンリーの運命が示すように私たちは適切なものとしてしっかりと認識する要素でもある。ダンの精神は自分の良心に近い題材について働いているらしい。その詩の機智は単に眩惑的な脱線ではなく信仰上の必要なものに対する答えとして見ることができる。

『腕輪』の中とか、破門についての冗談の含まれる『英国国教会忌避』<sup>(6)</sup>のようなエレジイの中で宗教的内容は大胆で明白であるのに、私たちは時として他のエレジイの中にダンの背信の背景に反して、誇張した意味を帯びる表面上偶然の言及を見いだすことがある。一例はダンが人目を盗んで恋人の家に入る描写の『香水』の中で起こる。

ぼくに拷問を受けた靴でさえ、口を割らず喋らなかつた。

ただ苦々しくも甘いやつめ、お前を身体に

振りかけたばかりに、ぼくを上手に裏切つてくれた。<sup>(7)</sup>

ここでは「拷問を受けた靴」の重要性以上に興味が起る香りにまで広がっているけれど、裏切りについての病的なこだわりはない。なぜならダンの解釈者たちが示すように、ダンは「強く激しい悲しみ」の刑と記される黙って立ち宣誓を拒否する重罪に問われた人々に課せられた彼の時代の身の毛のよだつ刑罰の一つに言及している

からである。後年の人生でさえ、彼は妙に激しい意見を持ち続けた事柄であった。私たちは彼が一六二九年の説教の中で罪に問われ返答を拒否することで法廷を挑発する「騒乱を起こす輩」に対して雄弁を振るうのを見る。彼が述べるように、このような犯罪者に聖餐式を執行しないのである。「いかに熱心にその囚人が死に際して望もうとも、いかに痛悔の念で他の全ての罪を告白しようとも」<sup>(8)</sup>

一般的に宣誓を拒む囚人は単に貧困から自分たちの扶養家族を救おうとしていた。なぜなら、もしその審理が進み彼らが重罪であると分かれば、彼らの財産は国に没収されるが、もし彼らが「強く激しい悲しみ」の刑のもとで死ぬのであれば、そうならないからである。なぜ彼らの絶望的な勇気がそんなにもダンを怒らせたのか。いつも彼を怒らせ、『香水』の中で決められた罰に関する冷淡な冗談を誘導したこの犯罪について何があったのか。カトリック教からの彼の不幸な激変にたぶん鍵がある。なぜなら罪に問われるとき黙秘して立つことは単に財産を守るための策略ではない。それは同様に有罪の判決に返答することでカトリック教徒の良心を裁判官が潔白の血で汚すことから救いたいと願う信徒たちの間の共通の実践であった。ダンが若者であったとき、「強く激しい悲しみ」の刑はカトリック教徒仲間内で知らぬ者なき悪評を勝ち得ていた。なぜならそれがエリザベス朝時代の最初の女性殉教者、マーガレット・クリソローの運命だったからである。

ヨークの肉屋の妻マーガレット・クリソローは一五七四年にカトリック教徒になって、一五八六年イエズス会士でありドローウェーで教育を受けた渡英宣教師たちを匿ったかどで有罪となった。宣誓を拒否したので彼女は圧死の刑を宣告された。この苦痛の間の彼女の堅忍と高潔は彼女の告解者ジョン・マッシュによって書かれた簡潔

な伝記で描写される。それは彼女の名声を英国中に広げた。彼女は柱に両手を縛られて裸にされ地面に横にされた。尖った石が背中の下に置かれ、戸板が彼女の上に載せられた。その上に重りが「少なくとも七、八百ポンドの重さに積み上げられ、それが彼女の肋骨を折り、その肋骨が皮膚を突き破った」。正式な刑によると、彼女は三日間圧縮され、生きたまま、その間「僅かばかりの大麦と溜まり水」を与えるべし、と明記されていた。しかし自らの神性に満たされたヨークの優しい婦人は死刑執行人たちを説き伏せて自分を素早く処刑させ、たった十五分で死んでしまった。彼女が死んだとき三十歳位であり妊娠していた。<sup>(9)</sup>

ダンの「拷問を受けた靴」についての洒落は、その当時、最初は駄洒落かなと思えるようなものではない。『腕輪』の中で彼が殉教をおどけて扱うように、それは彼がもはや敢えて考慮しない思想と感情に対して自分を強固にすることができる。自分自身を麻痺させるために神聖なものを取り扱う。手の込んだ神聖冒瀆がまるでダンが自分自身を癒さなければならぬのは単にカトリック教からだけではなくキリスト教からであるかのように、同様に恋愛詩の中に組み入れられる。彼は自分の愛が否定によってのみ表現されるのだと宣言するとき、あるいは「寝にくる彼の恋人に」の中の裸の女性と「肉体を脱いだ魂」を比較するとき、彼は巧妙に『神学大全』の聖トマスが神性と祝福されたものの喜びについて書いたことを曲解している。キリストの「罪を負わされた」恩寵についてのカトリックとプロテスタントの議論は、同様に卑猥な根拠に求められる。<sup>(10)</sup> 真の宗教を発見するために努力して神学的読みの綱領を作っている一学徒が自分の読みの収穫をこのように非宗教的に使ってしまったのは奇妙なことである。しかしダンの祈りはいつも大胆か、あるいは絶

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

望的な雰囲気に交差していてピッタリだった。——彼が「この中断する苦悶の敬虔」と呼んだものである。<sup>(11)</sup>彼の神聖冒瀆はカトリック教主義から自分自身を自由にするための闘争が時々犬儒主義と不信へと導いたことを示している。

ダンは学識ある冒瀆の言葉によって、愛のエレジーから全体的に新しいものを作ることができた。このことが理解できるのは、私たちがダンの詩をオヴィディウスの『アモーレス』と比較したり、十六世紀の詩人たちのラテン語と現地語で作ったオヴィディウスの決まり文句の退屈な繰り返しと比較してみるときである。オヴィディウスがローマの花柳界に入って行けたのは最高に洗練された卑猥さがあったからである。比較してみるとダンのエレジーはその言葉と振る舞いにおいて突飛で風変わりである。オヴィディウスが夢見た以上にエレジーの製作者の頭の中でもっと多くのものが展開していた。すなわち魂が自らを辱めようとしている記録なのである。

しかしダンは神学に没頭していたから、このこと以上に自分の恋愛詩にさらに寛大で精神的な貢献をしたのである。もし私たちが同様に聖トマスから借用している『空気と天使』に目を向けてみると、全ての嘲りがその神学的な言及から導き出されたことが分る。

二度か三度、きみを愛したことがある、  
きみの顔や名前を知らなかったころ。

そのように一つの声、そのように一つの形のない炎として、  
天使たちが度々ぼくらに働きかけ、崇拜される。

きみがいるところに、ぼくが行くときにもなお、  
何か愛らしく輝く無をぼくは見ただけだった。<sup>(12)</sup>

そして最後にどのような女性の肉体を愛そうとしたのか、あまりにも抗しがたいほどの肉体の美しさを見いだしたのかをダンが説明したとき、その天使が詩に戻ってくる。

だから天使が天使ほどに純粹でなくても、  
なお純粹な空気の顔と翼を付けるように、

きみの愛はぼくの愛の天球になることができる。

ダンは私たちが見るように、いつも情熱的に天使に興味を持っていてたし、自分の神学的読みの中でその主題が最高に彼の想像力を掻き立てたし、自分の天使論を殆ど全部とってよいほどにトマス・アクィナスから導き出した。しかし、ここではそのために天使たちのことを思案しているのではない。押しなべて不可解である人間の愛の神秘の概略を示すために、その聖なる秘跡を使っているのである。私たちが一人の特定の女性に眼を止めるやいなや、なぜ彼女が全く正しく思えるのか。「ぼくたちの夢の女性に会うこと」について話題にし、ダンが予測しているように、その語句の役割は、とにかく彼女に会わないうちに彼女を知って愛したことになる。しかし、ダンのその女性についての先立つ幻想は夢ではなく、聖なるものである。その幻想は、火あるいは実体のない声のはかない純潔性を与えられる。すなわち、それらは欲望ではなく崇拜を呼び起こしている。そして、その男性が最終的に彼女を見ると、彼女は天空にとどまっただけで、「愛らしく輝く無」という彼の目には眩しすぎるまま、なお彼の霊的生活の一部となっている。理想化された姿にされてはいるけれど、それはまた私たちのどことなく普通の愛の経験に符合する。なぜなら、私たちが恋に落ちると、その女性が最初のう

ちそのまわりの地上のものや人々とは違って見えることがあるからである。彼女は他の天球から来た存在のように光を放つ特質を持っているので、彼女に触れようと思うだけで震え、息ができなくなってしまう。ここで、ダンがアキイナスを使うのは、エレジーがそうであるように、その詩とアキイナスを軽くするというよりむしろ両方の深刻さを高めることになる。女性を天使に譬えることは、標準的なエリザベス朝時代の詩的用法に登場していたのだし、けっしてお世辞になる危険性はない。それは一つの奇蹟を伝えている。聖なるものへの探究は、ダンの人間の見方に光を当てることである。

恋愛詩の中で、宗教が持つこの深まる効果は『聖列加入式』、『聖遺物』、『埋葬』の中で最も明白である。これらの三つの最初の詩の中で、私たちは詩が進行するにつれ、明確に沸き上がってくる聖性を感じるができる。宗教的論旨は荒れ狂う状況、大雑把に言えば愛のエレジーのような状況で出発する。ダンが愛のためにこの世を捨て去った失意の身出世主義者のように振る舞っている。事実、結婚をしたときそうしてきたし、失ったものを考えたと憤懣やるかたないのである。感情むき出して、絶望的である。——「ぼくらは愛に生きられなくても、死ぬことならできる」——そして使い古されたエリザベス朝の「死ぬ」についての洒落は（「オーガスムを経験する」を意味する）神聖冒瀆を伴った彼の怒りに活力をもたらす機会を与える。

ぼくらは死んでまた同じ姿で甦り、  
この愛のために秘跡となる。

詩はキリストの復活を山車にしてこの気の短い勝利を達成する。そ

の復活は、侮辱的な意味で謎かけの武器となる。すなわち褥を共にした二人は人類の救い主と同様に「死んで甦る」ことができるのである。しかしその詩は最後の二つの連の中でその淫蕩さを脱却させる。死の思いはダンの心の中に留まり、その埋葬に関する慰めをもたらす。墓の中の休息、そしてそれ以上のもの——御墨付の復権——がある。すなわち最後には、教会の中での地位である。ダンが未来の時代に聖者として祈られる自分自身とその女性を想像する。『聖列加入式』が書かれたのは、いつもダンの背信よりかなり後になると見なされるが、彼の思考の習慣は自分が恐怖に震えるのを感じる時、カトリック教徒のままである。聖者に取りなしの祈りをするとは、カトリック教会の教義であり、英国国教会によっては否認されていたのである。しかしながら、それが嵐のような詩の終わりでダンを和ませるのは、未来の崇拜者たちが自分のために神との仲を取りなすように彼に祈ることを考えているためである。

その慰めは、幾分空想することでカトリック教会へ受け入れられることから出ている。だからこそ「愛のために聖列に加えられる」のである。その詩の終わりが魔法を掛けるがごとくに帳消しにするのは棒に振った出世だけではなく背信なのである。崇拜者たちの祈りの清い調子は見せ掛けの宗教を本物にして、初期の神聖冒瀆を乗り越える。

敬虔なる愛によって

お互いの修道院となられた聖徒さま  
今時の愛は狂気ですが、愛が平安であった聖徒さま、

カトリックの響きを含んでいる「修道院」という語は彼らの愛に純

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

潔を授ける。『空気と天使』に関して私たちは宗教的不思議さの力点はその詩を価値あるものにするのである、と認識している。悲哀についても然り。なぜならその未来の崇拜者たちは結局のところ間違いのだから。ダンのすさまじい激論は詩の中で愛など決して自分にとって「平安」にはならないことを私たちに示している。彼は死後に誰かが自分を平安に満ちていると信じることによってのみ平安に到達する。

ぼくが死んだとき、覚えておいてくれ、  
そしてぼくが死んだとき、簡素なものにしてくれ。<sup>(14)</sup>

キース・ダグラス<sup>(1)</sup>のようにダンはそのことを欲する。簡素にすることでその傷と裏切りを取り払うことができる。

『聖遺物』と『葬式』はまた共に死を願う詩である。それらは死の権威を切望し、それを保証するために『聖遺物』は墓の彼方から詠唱されるメッセージで終わる。『聖列加入式』のように、この詩は進んで行くにつれて益々聖化される。先ずダンのカトリック教に対する知的な侮辱が支配する。彼の骸骨と髪の毛の腕輪が墓から引き揚げられるとき、彼が予言するようにカトリック教会の身の毛のよだつような骨董品に加えられ、馬鹿な女どもにも崇められることとなる。ダンはいこれらの心得違いの崇拜者たちを挑戦的な人道主義宣言に着手することによって混乱させる。その偽善的な馬鹿者から自身自身と愛する女性を峻別するのが宣言である。

このような時代に奇蹟が求められるから、  
その時代にこの紙きれによって教えられた

無邪気なぼくたち恋人がどんな奇蹟をなしたのかを

最初ぼくたちは充分に誠実に愛した、

だがぼくたちが愛したものの、その理由も知らなかった。

ぼくたちが性の違いを知らないのは

ぼくたちの守護天使が知らないのと同じ

これらの奇蹟はぼくたちがしたものだ。でも、いまではああ、

全てのはかり、全てのことばをぼくは使うべきであり、

彼女は何という奇蹟であったのかを言うべきなのだ。<sup>(15)</sup>

人道主義者なのか。そう思えるのは私たちが「守護天使」に辿り着きその天使たちの内包しているものが初期の宗教的なややこしい無意味な儀式を破棄した後の天空の驚き携えてくるまでである。守護天使を信ずることはダンには魅力であった。彼は警告しているが、たとえ信じていなくとも「なお神の天使たちの前で人間はすることすべてを知っている」<sup>(16)</sup>。特別な天上の存在があるという確信は自分を守ってくれることを求めることであり、自分を神に対する子供として教え込まれてきたことであり、ダンはその放棄することはできないのであろう。その子供のような信仰の事柄はここで輝き出し、その光の中で恋人たちを泳がせている。恋人たちは私たちが知るように単なる純潔ではなく無垢であった。天使たちのように性による汚れない。ダンは墓の権威と同様にその純粹さを望む。彼が愛について語りたことを述べるために、自分が死んでその女性も身体が縮んで輝く聖骨に浄化されることを想像しなければならぬ。その詩が宗教的であるのは私たちが宗教的情緒として考えってしまう礼拝と聖域のあの直観の故郷を見いだそうとしているからな

のである。そしてその故郷を女性の純潔の中に見いだしている。この観点から同じように人道主義者の詩になる。宗教の秘跡の敬虔さは女性を変えてしまふし、正にそうなるのは彼女が宗教の秘跡以上に敬虔であり、人間の驚異であるとダンが宣言しているからである。

もし私たちがダンの心理のためにその詩を説明しようとするのであれば、私たちは彼がカトリックの迷信（聖遺物、奇蹟）を拒否することによって焦点なき聖なるものへの渴きが残ることになったと言えるかもしれない。だから彼はそれを満足させるに足る昇華された人間愛の一形態を作り出す。愛は背信によって残された谷間を満たすからである。『聖遺物』はこのような図式に還元されはしないが、それらはその生活の一部である。

そこでまた『聖遺物』のように僅かにカトリックの迷信に触れている『埋葬』を取り上げてみると、カトリック的であるのと迷信的であるのと両方である何かとそれを置き換えているだけである。ダンは腕に巻かれた髪の毛が自分と共に埋められることを願っている。

なぜならば

愛の殉教者、偶像礼拝を生み出すかもしれぬ

もし他人の手にこの聖遺物が渡るとすれば。

カトリック教徒の間で聖遺物を崇めることが偶像礼拝を形成したことは一般的なプロテスタントの攻撃するところであった。しかしこの懐疑的な言いにも係わらず、その詩はその聖遺物から超自然の力を奪っているとは言いがたい。ダンは宗教的な空想に没頭して、その漠然とした世界で現実の生活が自分から奪っている殉教者の死を味わっている。彼の感情は少年時代に引き裂かれた海峡にそって

再び流れる。第一連は彼が聖なる目的を述べるとき畏怖の念かられて黙り込む。

誰であればくに経帷子を着せる人よ、どうか傷つけたり

くどくど審問したりしないでくれ、

ぼくの腕を飾るその不思議な髪の毛を。

手を触れてはならない秘跡で奇蹟、

それはぼくの物質になった魂だから……

私たちは詩行を読むと聖トマス・モアの奇蹟の歯の一つの半分を持つていた男の甥が書いたのだということを感じ起こさせる。これらの三つの詩の一つひとつに関して聖人と聖遺物の秘跡にダンが反応するのは疑いもなくローマ・カトリック教会の中で彼が育てられた結果なのである。

詩を難しくするものと、その難しさのゆえにエリザベス朝の詩の普通に恋人を崇めることと違うのはそのような詩が聖と俗、宗教的と非宗教的が同時にかつ不明瞭に存在しているということである。詩は宗教的危機の兆しと過去の経験の積み重ねの中にまだ疲れ果てて埋没するのではなく、思想の役割と葛藤に積極的であるものを伝える。ダンの多くの詩のように、これらが逆流しているがゆえに事実上はつきりと見ることは不可能である。じつと留まっていられないからである。私たちの立場から見ると、それは詩の偉大さの条件である。それが詩を生かし続けるからである。そしてダンの立場から見ると、私たちが推測するように最初にそれが詩を存在させたことなのであった。詩は決着の着かない対決が本物の人生の出来事の中ではできないときに、そこでなら楽しむことのできる私的な劇場を



## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

提供したのである。それがカトリック教の意味を伴う聖なるものについての感情がなぜその詩に宿るのかということであり、またその感情が決して確実に詩に宿るのではなく、いつも破壊的な要素と出会うという理由でもある。——事実、初めから破壊的であるのは、聖なるものについての感情は正義の宗教的働きから孤立して、人間愛へ移し替えられてきたからである。

ダンの『ホーリー・ソネット』は恋愛詩のように苦悩に引き裂かれていた。それらの詩は響きと怒りに満ちており、情熱的な議論の一時凌ぎの情勢によって辻褃が合っている。宗教が真面目な事柄であるなどと想像している批評家たちには不満足なのである。例えば、ウィルバー・サンダーズは詩が「怒鳴り散らす詭弁」であると不平を述べる。しかしこの言葉は単に祈りの完成したものからこれらの偉大な詩を区別する要素を大変良く描写している。宗教詩の日付は世俗的な詩の日付よりもかなり確かである。『ラ・コロナ』は一六〇七年になるし、『ア・リタニー』は一六〇八年であり、『ホーリー・ソネット』の数編は一六〇九年と一六一〇年に属している。もし『聖列加入式』のような恋愛詩の中の苦悩が宗教をやり込めるためとか、世俗的な応用にその聖域を借用するための努力からきているとすれば、『ホーリー・ソネット』の情熱はダンの苦悩に満ちた宗教的状况に再び突入することで和らげられる。彼はいかなる正式な意味でも決してキリスト教徒であることを止めはしなかったけれど、自分が神を失ってしまったという感情を持つようになったこととは否めない。私たちは何年かたつてから彼が妻の死について書いたソネットからこのことを知ることが出来る。そこで彼は妻という模範が自分に再び神を求めるように促してくれたと言う。彼の魂の新しい努力が古い苦悩を目覚めさせた。私たちが見てきたように彼

の精神は彼の人生のこの時期にカトリック教徒であった父親へと向かった。息子の内的な闘争を天国で見守っていてくれる父親を想像する。ダンの背信の意識が再び新たな宗教的追求をすることにより振り返りただけではなく、その間の恥辱にまみれた無駄な年月も疼いた。崇拜する気持ちを神から女性へと変えようとする偶像崇拜的な努力は、そのことを恋愛詩の中で記録してしまっていたのだが、彼を困惑させる。しかし彼はそれを彼の精神から取り除くことはできない。

怒鳴り散らす詭弁に警戒して単純に誰かの注意を引きつけるソネットの中に、私たちはこのことを見ることはできる——そして彼の神聖を汚す愛の記憶が引き起こすごちない爆発を見ることができ

この現在がこの世の最後の夜だつてかまうものか。

私の心の中に、おお魂よ、そこでお前は住み

十字架にかかったキリストの絵姿を見てくれ。

あの顔つきがお前を恐れさせることができるかどうか

言ってくれ。彼の目の涙は驚くべき光を消し、

血が彼の苦痛の表情を満たし、彼の刺し抜かれた頭から滴つ

ていたから、

そしてあの舌がお前を地獄へと宣告できるのか。

彼の敵の恐ろしい遺恨に許しを祈ったのに。

いや、できやしない。しかし私が偶像礼拝する中で、

全ての私の神聖を汚す女たち全てに言ったとき、

哀れみの美、陰悪さだけが

厳格さのしるし。だからお前に言う。

忌まわしい姿は邪悪な霊へ割り当てられると  
この美しい姿は哀れみの精神を確かにする。<sup>(19)</sup>

ダンの理論は明らかにここでは価値がない。彼が女性たちをベッドに誘うために（醜い女性たちは頑固であるが）使う際に思い起こす議論はいつも傲慢であり、身の毛のよだつ十字架上のキリストに応用された。私たちは神聖冒瀆にぎよとする。滑らかに謹厳な力を備えて自分のソネットを発展させたいと願う詩人なら誰でも最後の六行をそのままにしておくことはどうあっても出来なかつたであろう。六行は八行連句の華麗な落着きの連続を用いることで消し去られ、置き換えられたであろうに。その結果、華麗ではないが、力強さは出たのである。実際、その詩には異様な性愛を扱った議論に対する劇的な混乱があるし、その議論は抑えがたい興奮状態へと詩を駆り立てている。私たちがその六行連句を読むとき、誰がどうしてそんなことを信じることができたのか、と不思議に思う。それと同時に、私たちにダンの自暴自棄を痛感させる。彼は救い主の血潮滴る顔を瞑想し、自分に救いを確認させるある議論を捜し求める。しかし彼には習慣になつていた眩惑させ放蕩な思いの間で見いだすことのできる全てが、最後の六行が作り出す哀れで美しい顔についてのひどい戯言である。

神に直面するときの詩の議論上の挫折によつて、私たちはその限界に屈辱的に気づく精神を垣間見ることが出来る。もちろんダンは自分の議論の挫折について注釈をしない。そのソネットは尾連を持つておらず、何かがその思いの詩行に足りないことを明らかにする。この中で私たちが見るように、不明瞭に注意を引きつけるそれらの詩の論拠の中で私たちが同じように間違いや矛盾を看破することに

掛かっている『ソングズ・アンド・ソネット』の多くの詩に似ている。しかし私たちが彼がキリストの両の目とその「驚くべき光」について考えるとき、自分の頭と舌がいかに汚れているのかを感じたし、感じ続けたと指摘できる。「私はあの御眼差し的美丽さと栄光について何か言おう」と彼は後に説教の中で書いた。「そしてことばではなく、私自身は低いものの中で誤つて使つてきたようなものを見つけることができる」と。その説教はソネットの最後の六行が告白せずに単に示すもの―汚れた精神の無能さ―を告白する。

彼が神に言うために見つけることの出来るもので不向きなものが『ホーリー・ソネット』の中で繰り返しダンを苦しめる。彼が祈ろうとするときでさえ、自分自身の努力を冷笑する。「祈りと詔いの言葉の中で私は神を求めぬ<sup>(21)</sup>」彼が価値がないと感じるのは正しくない―それは全く適切である。心を痛ませているものが本当に無価値であると考えられないことにある。彼の中にある何かが麻痺する、あるいは無力にされる。彼は女性の尻を追い掛けるのに放蕩の限りを尽くしてきた。今や彼は彼の溜め息や涙を再び取り戻したいと思うが、何も残っていない、

あああの溜め息と涙が再び戻るかも知れぬ  
私の胸と両の目に。私はそれらを使い尽くしてきた  
私はこの聖なる不満足の中で  
報いと共に嘆くかもしれない。<sup>(22)</sup>

それを感じない感情は彼の心の中に瘡のようにある。彼は自分を潰したり、溶かしてくれと神に懇願する。「私の心を破城槌で打つて下さい。……壊し、吹き飛ばし、燃やして私を新しく作り替えて

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

下さい。』しかし『ホーリー・ソネッツ』の自暴自棄は応えられないその祈りに掛かっている。もしそうであれば、彼は救われる苦痛の煩悶を感じることができ得るであろう。実際、ソネットを引き裂く苦痛は痛みのない霊的麻痺の苦痛である。それは神を捨て去ることを示す。苦痛に飢え乾くことは騒がしいほどに明白である。

あなた方ユダヤ人たちよ、私の顔に唾を吐き、私の脇を刺しなさい。

私を拳で打ち、嘲笑し、鞭で打ち、十字架に掛けなさい。

あの叫びの中で身震いするのはイエスに対する哀れみよりもむしろ十字架に掛かったイエスを羨んでいることである。ダンは釘と剣に身を任せざる。十字架を抱き、非常な喜びを覚えながら唾を飲み込もうと顔をあげる。非常に快い期待の中で鞭を貰う。しかし何も起らない。彼が悟るようにあの血塗られた喜びには合わない。キリストと違つて彼が死んでも少しも善を行うことができない。その詩の初めの我を忘れた蔑みのあと、彼は役に立たない罪という古い感情へと隠蔽した。

ダンが苦悩する必要があつたことを理解するのは難しいことではない。彼の魂が死んでいることが彼を苦しめるのだということは、ただすでに死んでいる魂にとつては奇妙に聞こえる。しかしお馴染みとはいへ、彼の感情は同様に彼の奇妙な精神史のはけ口であつた。カトリック教と縁をきる際に彼は迫害と英国の法律が押しつけた屈辱を感じさせる無力さを巧みに逃れてきた。彼の弟と他の卓越した家族の人達とは違つて、彼は殉教の権利を失つてしまつていた。私たちが思い起こすように彼の子供時代から彼の前にずつて輝いてき

た目標があつた。彼は『ホーリー・ソネッツ』を作っている正にその時「殉教について黙想しつつ、私はずっと目覚めていた」と彼は言明した。彼は自分自身の相対的な気安さと英国のカトリック教徒の苦悶とを比べざるを得なかつた。彼はソネットの中で張り合うように苦痛を望む。自分が責任を逃れていることについて弱々しく拒否されたもののように彼には思われたからである。まるで迫害から逃れることについて消えない罪悪感あるいは失望を宥めるためであつたかのように、ダンは生涯を通じて、忍耐力が鈍くなつたり、勇壮でなくなつても、結局のところは殉教に値するかもしれない自分自身を、説教や到る所で思い出させ続けた。それ自体で殉教であるかのように「悔い改めと痛悔にあふれた私たちの涙」を神様が受け入れてくださるであろう、と彼は自分の会衆を安心させる。全ての殉教が「異端焚刑の殉教」とは限らない。私たちの生活と経歴の中の逆境を耐えることが「私たちに殉教の褒賞の権利を与えることになる。」死別の中でも、私たちは彼の娘の死んだ後に話した説教から知るように殉教すると言う感情の苦い満足を擲もうとする。彼は自分自身を思い起こして彼の悲しみは天国での彼の身分を引き上げるであろう。なぜなら、全ての悲しみは「殉教の程度であり、だから引き上げの程度であり、私たちの復活を向上させること」だからである。殉教者に成りたいという希望はダンの最も強い感情の一つであつたし、自分の信仰のために死んだカトリック教徒が本当の殉教者であることを彼が『似而非殉教者』の中で否定するのは自分より彼らの方の有利な立場にあることを格下げする方法と見ることが出来る。生き続けることが本物の殉教である、と彼は主張する。正確には断頭台に消えるという魅惑に敵対することを含んでいるからである。「殉教者にならないことが、殉教なのである。」

『ホーリー・ソネツ』の中で非常に耳障りに表現されていて、苦しめる神を彼が必要としているのは、同質の不満となつてゐる部分である内的な冷淡さの感情に対するのと同様に逃してしまつた殉教についてこの感受性に關係してゐるのである。その休眠から彼の魂を目覚めさせるために彼は聖イグナティウス・ロヨラが編み出した靈の訓練の計画に頼ろうとしていたようである。その靈の訓練はしばしば聴罪司祭たちによつてカトリック教徒に規定されてゐた。その訓練の全課程は四週間かかるように作られていて、自分の罪、キリストの生涯、十字架と復活についての黙想を構成してゐた。その目的は情緒を刺激することであつた。たとえばその訓練者は三週間目、いかなる喜びの思いも、聖なるものさえ認めず、絶え間無くキリストの悲しみを思い起こすことにより自分の苦痛と苦悶を喚起するように勧めを受けた。カトリック教徒の靈的助言者たちはその制度の成功に有利な証言をした。ジョン・ジェラードは述べてゐる。地方の立派な紳士で自分が受け持つてゐる一人が全く感情を表さず二週間目の最後の二日目まで来たが、「それから突然(いわゆる)南風が彼の魂の庭に吹き込んで来て」彼は止めどなく三日、四日泣いてゐた。仕事で彼が外出しなければならなかつたときでさえ、彼は涙にむせんで涸れてしまつた声しか話せなかつた。そして彼は「一歳の子供のように」<sup>(89)</sup>どこでもジェラードについて回つた。

ダンがこの痛ましい全課程を取つたのか、それとも計画的な方法でそれに申し込みさせたのかどうか私たちには分からない。しかし靈的訓練の言葉の使い方は『ホーリー・ソネツ』の中にあまりにもはつきりと述べる事ができるので、書いていたときダンの心の中にそれらが存在してゐたことは疑いのないことである。これは一九三〇年頃の昔にT・S・エリオットが気付いたことであつた。し

かし彼はイグナティウスとダンが共通に持つてゐる「イメージの蓄え」をむしろ奇妙だと言つてゐる。通常の言葉の意味でイメージは一般的に靈的訓練から抜け落ちてゐる。むしろ読み比べてゐる人を感動させるものは『ホーリー・ソネツ』が表すイグナティウスの特殊な指導に従順であり、変更修正してゐるのである。たとえばイグナティウスはキリストの十字架を瞑想して「苦しみにあうキリストと一体となる悲しみ、涙、苦痛を求め」<sup>(90)</sup>てゐる信者に助言をする。私たちはダンの中に涙のための彼の嘆願を発見することが出来る。しかしそれは私たちがそれを見ると自己卑下あるいは涙を流させるようには聞こえない。それは彼自身の無味乾燥と感受性が鈍くなつてゐることに絶望してゐる大いなる意思表示となつてきた。

最も高きにあるあの天国の向こうのあなたは  
新しい天球を発見して、その新しい土地を描くことができる  
私の両目に新しい海がうねり、そこで私は  
熱心に涙を流すことで私の世界を  
溺れさせてしまうのかもしれない。<sup>(91)</sup>

第一週の第二の訓練に含まれてゐる人の罪についての黙想のとき、イグナティウスは「人の心にある全ての生きものを経験させることによつて、驚くべき奇蹟を、すなわち、いかにそのような生きものが生きようとする人を苦しめてゐるかを強烈な影響力を持つて」<sup>(92)</sup>要求する。ダンは同様にこの方向に進むが、私たちは彼の叫び声の中でイグナティウスが期待する影響力を見失う。その代わりに宇宙の生命を支える姿に自分自身が値しないことに苛立ちがある。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

なぜ私たちは全ての生きものにかしずかれるのか。

なぜ豊饒な元素が私に生命と食べ物を

与えるのか。私よりさらに純粹で、

質素で墮落からもっと遠くにあるのに。<sup>(35)</sup>

そしてイグナティウスの崇拜者が刻み込むことを期待される自然の奇蹟についての長くうっとりする目録の代わりに、ダンが世界の中身（馬、雄牛、雄豚）を表にしたものは苛立つように省略される。これらの苛立ちにも係わらず、初期段階のイグナティウスの推進力は誤りがなく、ダンの『ホーリー・ソネット』の中の様々な思いの取決めの間にはさらに普遍的な相似がある。そしてイグナティウスの実践は数人の批評家たちによって研究されてきている。彼はコンポシテオ・ロキー—自分自身の死というような、場面とか状況の生き生きと想像すること—を採用したし、その訓練が規定するとき祈りや対話形式を使ってそれに従っている。

そこでダンが『イグナティウス秘密会議』でロヨラとイエズ会士たちについて下劣な攻撃を準備していた正にその時、『ホーリー・ソネット』の中で私たちが心に留めている彼の霊的生活は彼らがダンに教えたものに関して自ずから形成し滋養となっていたのである。これは私たちがソネットの内的動揺を理解するのに役立つかもしれない。カトリック教徒の敬虔さの名残りもその訓練のこの掘り所に特定されるのではない。ヘレン・ガードナーが示しているように『ラ・コロナ』はその最初のソネットの中でローマ・カトリック教の聖務日課書のキリスト降誕節祈禱からの考えと語句を組み込んでいる。その第一第二のソネットの中で中世から受け継いだカトリック教平信徒の祈禱書<sup>(36)</sup>である『小祈禱書』の一部を形成していた

聖処女マリアを思い起こす。『ラ・コロナ』と『ア・リタニー』の中で彼女は人類の贖いの一部を担って保証されている。彼女は

智天使ケルビム

天国の鍵を外した者。<sup>(37)</sup>

英国国教会の聖職についてあと、ダンはこのようなどんなローマ・カトリック教徒の考えをも非難することとなった。「彼女が成したどんなものも」と初期の説教の中で聖処女マリアについて語りながら「私たちを贖うあの宝物であるあの贖罪へと入ることはなかった」ことを主張する。「修道院」と「聖地巡礼」のようなカトリック教の言葉が恋愛詩の中のダンのために持ち続ける神聖な響きは『ラ・コロナ』の中で聖母マリアの胎内で用いる暗喩の中に再び取り上げられる。

あなたはほとんど隙間のない中に

あなたの麗しい胎内に修道院となった無限の空間<sup>(38)</sup>

修道院のイメージは聖処女マリアの喜びのためにローマ・カトリック教会の中で使われた早朝讃美歌から得ている。ダンがそれを解釈して表現することで確かに私たちは「一つの小さな空間を到る所とする」<sup>(39)</sup>。『おはよう』の中の愛を思い出させる。その繋がりは異なった「麗しい胎内」が含まれていたとしても、如何にダンの初期の訓練が恋愛詩に影響を及ぼしていたかを示している。

ともかくダンの宗教詩の中のカトリックの知識は非常に明瞭にして十分である。それらの知識はそれを表明をしている宗教を放棄し

ている人物が集めたものであり、深いところでは彼はなおその宗教に結びつけられている。もちろん彼を隠れカトリック教徒だ、などと述べるのは誇張になるであろう。公然と誓って止めていたはずの礼拝出席にこっそり行っていたのだから。彼の状況は単純ではなかった。一方ではカトリック教への帰依というある側面が彼にとつて第二の天性であった。他方では英国国教会宣伝活動の歯車の一部になったけれど、彼は現存する教会の一つひとつの中の短所に敏感に気付いていた。カトリック教会と改革派教会についてグッドイヤーに手紙を書いたとき、ダンはその恵みの「シスターズ・ティーツ」と描写したが、両方とも「病気になるって、感染している」と付け加えている。<sup>(41)</sup>このような批判的に見ている一つの推論は神の選びの一回から自分自身が孤立しているという感覚であった。すなわち見捨てられていて、全体から外れたものであるということである。

地獄に落ちるその恐怖はダンをしつかり掴まえた。しかしそれを感じることが罪深いことを彼は知ってはいた。「罪深く、反逆的な黒胆汁」と彼はその恐怖を説教の中で呼び、続く文章の中でそれが魂から「取り除ぞかれるのには一番分解しにくい液体」<sup>(42)</sup>であると付け加える。この「恐怖という罪」は「父なる神への讚美」<sup>(43)</sup>が示すように聖職についてからもずっと長く彼に留まっていた。それは『ホーリー・ソネツ』を分裂させる。神の審判の予定は戦慄である。

……私の絶えまず目覚めている部分がその顔をみるであろう。  
その恐れはすでに私の全ての関節を震わせる。<sup>(44)</sup>

これが絶えず付きまとう罪であることを知るけれど、ダンも戦うために自分自身の中のその罪を意図的に刺激したことが提示されている。『ホーリー・ソネツ 一』の中で我々はその詩の八行連句の中の話者が罪と死と地獄を思うときの「絶望」と「恐怖」の感情を故意に起こし、それから六行連句の中でしつかりと神の恩寵の確信にとつてそれらを撃退するのを見る」とルイス・マーツは書く。しかしこれが私たちの見るものなのか。ここにそのソネツがある。

あなたは私を作りたまい、そしてあなたの作品は朽ちるのか。  
私を今作り替えたまえ、いま私の終わりが急いでいるから  
私は死に向かつて走る。死は素早く私と出会う

そしてすべて私の喜びは昨日のごとく  
私はあえて私の霞んだ眼をうごかさない。  
背後にある絶望と前にある死がこのように

恐怖を投げ掛ける。私の弱々しい肉体は  
その中の罪によつて衰える。地獄に向かつて肉体は目方を計  
る。

あなただけは天上にいる。あなたに向かつて  
あなたの許しにより私は見ることができ、再び立つことができ  
る。

しかし私たちの古い陰險な敵は私を誘惑するので  
一時間たりとも私は自分自身を持ちこたえることができない。  
あなたの恩寵は私が敵の出方を止めるのを促す。  
磁石のごときあなたは私の鉄のこころを引きつける。<sup>(45)</sup>

ダンも自らの努力によつては自分自身が絶望への誘惑と戦えな

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

いことを宣言している。神を見上げるとき、彼は絶望に勝って立ち上がることができる。しかし人類の「陰險な敵」であるサタンの努力はこの安心が一時的であることを確実にする。神の恩寵が自分に悪魔の策略をやつつける力を与えることが「できる」とダンは思っている。その詩が終わるとき、心がおも「鉄」のまま、錠前になつて、頑固で、応答がないとしても、自分が望むならば、神は自分の心を引きつけてくださることが「できる」とも思っている。神はこの見込みのない衰えた金属を贖うために磁石になることができる。しかし神はそうするだろうか。その手始めは神から出てこなければならぬ。神の「許し」がなければダンは一瞬たりとも見上げることさえできないのだから。しかし神がこの第一歩を進めてくれることをダンは確信していない。六行連句の中で表現されるように、彼の現在の状態は絶望的な欠点の一つである。彼はたった一時間も彼自身を持ちこたえることができない。彼は溺れ掛けている人間であり、神が救命帯を投げ込みさえすれば、全て上手く行くことを土手で心配している見物人に熱心に知らせる。しかし全く救命帯は手近に用意されていないし、もつと悪いことに水の中のその男は自分が救われるに値しないことを知っている。私たちはダンが神の恩寵にあるという自信によって絶望を「しっかり撃退」するのを見ているのだとするマーツの確信は私たちが詩の終わりという条件つきの自然に働き掛け、疑いを自信に、溺死を救命と読み誤らせてしまう。

神の役割の一面だけのための同質の必要性と神がまだ必要な行動を取っていないという同じ確かさは「私の心を破城槌で打つてくさい」の中で表現されている。ここでは少なくとも彼の心はもはや「鉄」ではない。彼は神を愛している。しかしそれが善を行うので

はない。彼は神からも愛される愛を全く感じない。悪魔が彼を捕らえているから。

……心から私はあなたを愛します。喜んで愛されます。しかし私はあなたの敵と婚約しているのです。

別れさせてください。再びその結び目を解き放つか、壊してください。

あなたのところへ連れていき、私を閉じ込めてください。あなた

わたしを奴隷にする以外、私は自由になれないし、ずっと貞節でもいられないから。ただ私を凌辱してください。<sup>(47)</sup>

神が何の行動も取らないことがダンを怒らせる。私たちが『ホーリー・ソネツ』の激烈さの背後に聞くことのできるのは実は恐怖だけではなく憤慨なのである。彼は激怒して非難を込めた質問へと入っていく。

なぜ悪魔はその時私の中に不当に入り込むのか。

なぜ盗み、否強奪するのか、あなたの権利なのに。

ただあなたは立ち上がり、あなた自身の業のために戦うだけ。

ああ私はすぐに絶望するでしょう。それはあなたが十分に人類を愛しているが、私を選んで下さらないとき、

そして悪魔が私を嫌っているが、私を失うのをもつと嫌っているとき。<sup>(48)</sup>

最後の三行は神への警告である。彼は遠くに行き過ぎるかもしれない

いし、あまりにも長く眼を逸らしているかもしれない。信じようと信じまいと、耐えきれないストレスの連続で誰もが訴えたくなくなるような約束あるいは脅して神を恐喝しようとするあの狂気の企てがその三行には内在している。私の子供を救ってみよ、そうすれば信じよう、と私たちは言う。私を救ってみよ、さもなければ金輪際信じるものか、とダンと言う。その時あなたは善の故に私を失ったことになるのだから。そして私は「すぐに」止める。あなたが十分な時を持つていないのだから。もちろん不条理である。しかし私は「あなたの作品」ではないのかという自己正当化と、結局「あなたは人類を十分に愛する」のに何故私は含まれていないのかという哀れを誘う力と私は「権限」であなたのものであるけれどサタンはあなたよりも私について思い悩み、当てこすりの大胆な比較で防護措置を取っていて性急に異議申し立てをするのは全て現実である。その声は生きている。完全な神にそれは全てあなたの失敗なのだと言いたい誘惑は、そのことを私たちがなげまぜの感情の中で見ることになるのだが、神が激怒しながらも平然としていることでダンは自分が駆り立てられているのを感じるある程度の極論である。ルイス・マーツが提示するように、このソネットは恐怖と絶望を根絶するように意図され、冷静に組み立てられた祈りの訓練として始まるなら、私たちはそれらが訓練としては失敗で、詩として成功したということができるだけである。

ダンが悪魔に属しているという彼自身の恐怖は根も葉もない空想ではない。サタンの実在を信じることは実際に十七世紀の初めには普遍的なものであった。様々の形をして地上を歩く悪魔を見たことがしばしば当時の日記とパンフレットに報告されている。宗教的絶望から受ける苦しみは特別に悪魔の訪問を示すことであった。ロバ

ート・バートンはこのような人々が習慣的に「硫黄の匂いをさせ」  
「悪魔と親しげに話す」ことを証明している。十七世紀の医者  
の症例本の中で私たちは人間あるいは動物の形をした悪魔を見たことを  
確信する数人の患者を発見する。ジョン・バニヤンは祈って跪いて  
いるとき、サタンが自分の服を噛むのを感じたことがあった。<sup>49</sup>ダン自  
身の家族の中でもごく最近この様な出来事があった。彼の叔父ジャ  
スパー・ヘイウッドが一五九八年一月ナポリで死ぬ少し前、悪魔が  
彼に現れて言った。「お前は正統でない教えの故に地獄に行くぞ」  
と。幸運にもヘイウッドは彼の従兄弟よりもっと自信を持ってい  
た。「嘘つきめ」と彼は叫ぶと悪魔はどぎまぎして去っていったと  
いう。<sup>50</sup>私たちはダンが生きているもの、家族の知人として話す悪魔が  
手近かにいるのを感じなければ『ホーリー・ソネット』の恐怖を分  
かち合うことはできない。

ダンの時代で宗教的絶望の自然な成り行きは自殺であった。その  
は悪魔の傑作であった。彼が神から見捨てられた、また罪に溺れて  
いると感じる魂を見出すとき、彼は、それを確実に自分のものとす  
るために、自らを殺すという考えを持って魂を誘惑した。このこと  
は自殺の基本となる説明であった。際限なく神についての著書の中  
で繰り返され、道徳劇の中で劇化された。<sup>51</sup>「鉄の心」を持ち、疎む  
ような恐怖（私は敢えて天国を見なかつた）、後悔のための狂気だ  
が欲求不満の欲望（如何に悔い改めるべきかを私に教えてください）  
そして契約上は悪魔のものであるという感情（あなたの敵と婚約し  
ている）を持ってダンはサタンとの協定した後マローのファウス  
タスの絶望的な状況に進んで行く。

私の心は冷淡になり、悔い改めることが出来ない。



## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

私は決して救い、信仰あるいは天国の名を正確に口に出来ない。  
い。

ただ恐怖の筭が私の耳に轟く。

「ファウスタスよ、汝は呪われよ！」すると銃と短剣、

刀、毒、絞首索、毒を塗った剣が

私自身を殺そうと私の前に置かれる。<sup>62)</sup>

ダンはこちらの運命を決する亡霊を十分に知っていた。彼は私たちに告げるように自分を殺したい欲望にしばしば捉えられた。そして彼がこの「病的な傾向」を自ら癒すことができなかつたから、自殺が結局は悪魔から出たのではない、と信じようとして苦しんだ。私たちは彼が論争するように「自らを殺す者全てが神のお慈悲という自暴自棄からそのようにしてきたのだ」と確信することは出来ない。この点があまりに彼にとって重大だと思えたのでそれを証明するために大論文を書いたのである。だが、彼が認めるようにその主題の先取り自体がサタンから来るかもしれないことを自らの力で知った。「共通の敵が私の中のサタンに対してさらに開け難く錠をしたそのドア」<sup>63)</sup>を見いだすことはありえた。

ダンの『ホーリー・ソネツ』の宗教的絶望の他の症状は言及されてきたように極端な十七世紀プロテスタント信者たちの精神的自伝の中に見いだされるものと似通っている。彼は動物に嫉妬している。なぜなら自分が地獄に落ちる可能性があるときに動物たちは地獄に落ちないからである。

好色な山羊、嫉妬深い蛇が

ああ、地獄に落ちないなら、なぜ私がそうなるのか。<sup>64)</sup>

彼は自分の邪悪さが全て残りの被造物のものに勝っているとは思っていない。かつて存在した全ての魂の罪に対して彼は自分自身の魂の釣合いをとる。「これら全ての魂の上に私の罪は繋がっている。」両方のこの病的な強迫観念はジョン・バニヤンの霊的危機の記録『信仰告白録』の中で比較される。バニヤンもまた獣たちに嫉妬する。「嬉しいことにわたしは犬とか馬ではなかつた。なぜならほとんどわたしの魂が減ぼされるように彼らは罪のために地獄の永劫に続く重みの下で滅ぶべき魂を持っていないのをわたしは知っているからである。」バニヤンは同様に自分の罪が人類の間にあるものと同じではないことも信じていた。「悪魔自身でなければ誰も内なる邪悪と心の汚れの点でわたしに匹敵する者はいない。それゆえにわたし自身の悪を見るにつけ深く絶望してしまふのを感じる」と。<sup>65)</sup>

これらの相似は自然である。なぜならダンがカトリック教を拒否したから、彼はプロテスタントの魂を掴まえるためにいつも備えられている檻の中で書かざるを得なくなつたからである。彼は『ホーリー・ソネツ』の一つで明確に範疇を説明する。もし悔い改めることさえできれば、恩寵を確かにして救われるであろう。「恩寵はもし悔い改めがあれば、恩寵を確かにして救われるであろう。「恩寵を受けたいうちに悔い改めが必要なら悔い改めるための恩寵を受けることができるのか。「誰が汝に始めるべきその恩寵を与えるのか」<sup>66)</sup>ダンの疑問はカトリック教とプロテスタントの神学の間での相違を際立たせる。カトリック教徒は信じたし、今も信じているのは人間の墮落した魂は恩寵の融和によって救われることである。洗礼の聖礼典を通じて第一に受け入れられ、カトリック教会が執行する他の聖礼典によって生長させられるのである。誕生から死までカトリック教徒は恩寵の特免を与える機関である情愛のこもつた保護の中で休

息する。さらに神の恩寵が賞賛に値する善き行いを達成することによって自分のための救いを勝ち得る効果的な段階を取ることができ。

比べてみると初期の十七世紀のプロテスタント信者はバラバラで手の施しようがなかった。カトリック教会ある聖礼典は恩寵を授与できると彼らは信じていなかった。迷信だとして奇蹟をおこす聖職者という考えを捨て去った。ミサは、そこでキリストの犠牲がその犠牲という救いの恩恵を礼拝する者たちに分かち与えるために再現されていることなのだ。プロテスタント信者にとっては一つの神聖冒瀆の劇のように思えた。プロテスタント神学の基礎は信仰のみによる救いの教義であった。この文脈の中で、信仰はもつと現代的な使い方におけるような神の存在を単に信じるということを意味しなかつた。すなわち地獄の悪魔でさえある種の信仰を持つていることが認められていたからである。彼らはそれなりに神が存在することを知っていた。信仰は自分自身の救いを信じることを意味した。キリストを自分の一人の救い主として意識的に受け入れる心理的行動を必要とした。しかしこの心理的行動は自分自身の努力を通して実現できない。プロテスタント神学者たちが信じた信仰は全て神の恵みに掛かっている。人間は信仰を手に入れるために何もできないのである。また徳ある行為によって信仰を制限しようとするいかなる手段もない。神は神にのみ知られた秘密の過程によって救う人々を選ぶのである。人間の「善き業」はカトリック教徒が善き行いを認識するような意味で単純にプロテスタントの理論体系の中に存在しなかつた。なぜならプロテスタント信者たちは人間が希望なく墜落した被造物として善き業をすることはできないと信じたからである。人間がなすことは救いに何ももたらすことができない。

これらのプロテスタントの教義の中での本来的な苦行のための機

会は嬉しいことにほとんど際限がないと言つてもよかつた。正にその理由の故に多くのプロテスタント信者たちはすでに十七世紀の初期にもつと穏やかで希望のある段階へとすでに移動していたのである。彼らは聖礼典により大きな強調点を置きピューリタンが押し進めた恐ろしい自己の発見に反対した。ダンのソネットは彼が良き英国教会の妥協から遠いことを示す。彼が自分自身を見いだしたところにはピューリタンの板挟みがあつた。救われるために救われていることを信じなければならぬ。しかしまだ救われていないなら、救われていることをどうして信じることができるのか。どのようにして必要な心理的段階をとつたとか信仰を手に入れたなどと自分自身を確かめることができるのか。そしてもし自分自身を確かめる必要があれば、まだ信仰を得ていないことを示してはいけないのか。神だけが信仰を与えることができ、何をしようとも信仰に値いすることは何もできないという理由で呪いを逃れるために何もできないことになってしまう。もちろん救われるために神に祈ることができ。しかし呪われた者もまたそれをするのであり得るのである。私たちは祈りによって救われぬ<sup>67</sup>。

そのように考えるとプロテスタント主義は苦悶の妙案であつた。それは独立した価値があつた。プロテスタント信者は自分自身と信じる神との間に司祭的な干渉は何も許さない。だから教会の聖なる聖職者の職務を拒否したのである。従つてその人の永遠の幸福の主題はその人にだけ降りかかつた。信仰による義認は結果として心の状態による義認を意味した。少なくともそのような神経を張り詰めた追ひ求める気質の中で必ずと言つてもよいほどに起こってくる絶え間無い苦悶する自己反省。なぜならそれが正しい状態にあるかどうかを知るために心を見つめざるを得ないからである。ダンプロテ

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

スタント教会のためにカトリック教を捨てたとき、懐疑の領域に足を踏み入れていて、この行動に移らなかつたなら『ホーリー・ソネット』は決して書かれなかつたであろう。それは彼の背信の結果生まれたものである。カトリック教徒の習慣のその痕跡にも係わらずそれらはプロテスタントの宗教的苦痛についての文書の間にあって、それらの苦しみはそれだけ大きくなっている。『ホーリー・ソネット』がさらに元気づける信条の中で養われた人物の作品であるからである。私たちが『諷刺詩 三』の中で見る個人的努力で救いを勝ち得るための傾向はカトリック教の特徴であつた。今や『ホーリー・ソネット』の中でダンは神が最初に行動しなければならず、自身の努力は役に立たないことを承認する。

私の心を破城槌で打ってください、三位一体の神よ。今まであなたはただびっくりさせ、息を吹き込み、光を放ち、改善するのを求めるだけ。……  
強奪された町のように私は異なつた義務を負いながら  
あなたを認めようと努力するが、ああ、無益になる。<sup>68</sup>

保証は外側から来なければならぬ。しかしプロテスタント信徒としてダンはその外側の保証から自分自身を切り離している。その保証はカトリック教徒には教会と聖礼典が与えてくれたのである。

だからダンの背信は『ホーリー・ソネット』からだけではなく最も偉大な恋愛詩からの何編かの必要十分条件として見ることができ。さらにも彼の背信の心理的因果関係について言っていることが正しいなら、私たちは彼の宗教的詩と恋愛詩はそれらが外見上ほどお互いに

遠くにはないと見ることができ。私たちは恋愛詩が女性の不実に繋がる強迫観念の中で堅固な愛情を引いたり、それに値すべき自分自身の能力について深刻な心配を展開していることを提示してきた。『ホーリー・ソネット』の中で地獄に落ちることと神の愛から外されることの彼の恐怖は宗教の領域へ置き換えられたその同じ心配を映し出す。ダンが自分の移り気な恋人に対して向けた憤慨は自分の不実（ぼくは誓いと祈りの中で心変わりをすると怠慢で無愛想に見える神を攻撃するために再び向けられる。彼自身が愛せない「黒い魂」と「鉄の心」<sup>69</sup>の性格に気づくことは神が自分を十分に大事にすることができなかつたことに対する激昂となつて表現されている。

私たちはダンが一六一七年に妻の死について書いたソネットを見ることがこの章を適切に終わらせることができる。というのは彼が受け入れるのと同時に悩み抜くその詩の主題である—愛に対する自分自身の気持ちを鎮めることができなからである。

愛した彼女は最後の負債を自然と  
彼女自身に支払つた。私の善が死んだ。  
彼女の魂は早くも天国につれ去られ  
全面的に私の心は天上のものに結ばれる。  
ここで賞賛すべき彼女を私の心があなたを  
求めるために攻撃した。そこで流れはその源を見せる。  
しかし私はあなたを思い出し私の渴きをあなたは覆つたけれど  
聖なる渴きをおぼえる水腫病はさらに私を溶かす。  
しかし私はもう愛を求めるべきではない。そのとき  
あなたは私の魂を求める。彼女の魂が全てをあなたに捧げる

から。

聖者と天使、聖なるものへの愛を許さないことを恐れるだけでなく

あなたが優しく嫉妬する中で肉なるこの世を疑わない。悪魔があなたを追い出した。<sup>60)</sup>

この詩についての一つの明らかなことは嘆きがないことである。ダンの格調高い調子がそれを抑える。第二行で彼は実際に妻の死を良いものとして表現する。彼女にとって良いと同時に自分にとっても良いのである。彼はすでに天国を手に入れており彼は地上の欲望から自由になっているからである。(彼女は三十三歳で十二番目の子供を出産した直後に死んだ。) 彼女を失ったことについてこの見解は「耐えられないほどひどい」<sup>61)</sup>とダンの編集者が描写している。しかし何くわぬ顔で切りぬけることは人が超人になったみたいな努力をすることのように思われる。六行目のあとその努力が崩れダンの混乱した感情が外に流れだす。傷つけるものは誰も彼を自分の望むようには愛さないという事実である。彼が認めるように神は「全ての」の愛を差し出しているが、それで十分ではないのである。彼は不満であることで自分自身に不満である。しかしそれで不満を取り除くことはできない。

死別への一つの取り組みとしてこれは自己中心のだと言えるかもしれない。しかしだからこそ喪失という全ての感情は自己中心的なのである。ダンがその事柄を点検することは非常に正直のように思えるし、その正直さの中で辛辣にも思えるのは、全てが良いとする最初の主張が弁解がましいけれど、あからさまの不満に道を譲っているからである。その結果は神が満足のいく恋人ではないということ

である。なぜならダンが十分に愛されているという気持にならなかつたからである。さらに事柄を悪くしているのは、神がダンの妻を取り去ってしまったのである。最後の四行の意味は神が彼の「優しく嫉妬する」のをダンの生涯で二度見せたように思われる。第一はプロテスタント信者たちが言ったように「聖者と天使」が礼拝されているカトリック教会から彼を追い出すことよってであった。第二はこの世と肉体と悪魔に關係する地上の愛情に彼が執着するのを断ち切るようにと妻を死なせることよってである。実際にダンが六行と七行で見せているように自分を神に連れていってくれたのは他ならぬ自分の妻であったのだ。だから神の彼女への嫉妬は全く必要がなかった。その詩は愛情に満ちた叱責の調子で終わる。ダンの考えの中で単なるこの世の欲望が彼に取って代わるのを疑うほどにどうして神はそんなにも優しく嫉妬深くあることができたのであるうか、とダンが問うているように思える。

そこで『ソングズ・アンド・ソネツ』の多くの詩の中でのように究極的にダンの主題は恋人との失意である。——自然ではあるが神に呼び掛けるとき、彼はそれを非常に機転をきかして言葉にし、責められるべきは自分自身であることを認める。このソネットがもつとも似ている恋愛詩は『愛の無関心』である。

もしぼくがきみの愛の全てを持っていないなら、

ねえ、ぼくは決してそれを全て持つことにはならない。<sup>62)</sup>

そこでダンが女性の愛の全体の所有を諦め最後にそんなものは持ちたくない事を認める。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

だがほくがまだ全てを持たない  
 全てを持つている人は最早持つことはできない。

これは彼の妻の死についてのソネットのように愛に関するところで彼の本来の姿は欲が深いことを認める。神によってさえも自分が十分に愛されることを信じることは不可能であると見てとった。もし私たちの診断が正しいなら、少なくともこの強迫観念の一つの原因は自信喪失、引き裂かれた忠誠心、個人的絆の切り離し、精神的放浪、手に入れた信用を受け継いだ確かさの喪失を伴う彼の背信の初期の危機である。

訳注

〔1〕キース・ダグラス（一九二〇—四四）イギリスの詩人。第二次大戦の終りノルマンディ上陸作戦で戦死した。一九三〇年代の詩風とは違ってロマン的であったが、アフリカ戦線の体験を語る詩は客観的で諷刺の鋭さをもつ。

原注

- (1) *Elegies*, 38.
- (2) *Elegies*, 29.
- (3) *Elegies*, 29.
- (4) *Elegies*, 19.
- (5) *Elegies*, 1-4.
- (6) *Elegies*, 10-11.
- (7) *Elegies*, 8.
- (8) *Sermons* ix, 162-3; see also *Bibliothecos*, 123.

- (6) John Mush, *The Life and Death of Margaret Clitherow*, ed. William Nicholson (1849).
- (10) *Elegies*, 56, 15, 178, 132.
- (11) *Divine Poems*, 24.
- (12) *Elegies*, 75-6.
- (13) *Elegies*, 73-5.
- (14) Keith Douglas, *Complete Poems* (1978) 74.
- (15) *Elegies*, 90.
- (16) *Sermons* iii, 153-4.
- (17) *Elegies*, 90-1.
- (18) Wilbur Sanders, *John Donne's Poetry* (Cambridge, 1971) 126.
- (18) *Divine Poems*, 10.
- (20) *Sermons* vii, 348.
- (21) *Divine Poems*, 16.
- (22) *Divine Poems*, 13.
- (23) *Divine Poems*, 11.
- (24) *Divine Poems*, 9.
- (25) *Pseudo-Martyr*, sig. A1r.
- (26) *Sermons* x, 177; viii, 186; vii, 391.
- (27) *Divine Poems*, 20.
- (28) 参照° St Ignatius, *Spiritual Exercises*, trans. Fr John Morris et al., ed. Henry Keane, S. J. (5th edn., 1952).
- (29) John Gerard: *The Autobiography of an Elizabethan*, trans. P. Caraman (2nd edn., 1956), 27.
- (30) 参照° Louis Martz, *The Poetry of Meditation* (rev. edn., New Haven, Conn., 1962); doubts about the extent of Ignatius's

- influence are expressed by S. Archer, 'Meditation and the Structure of Donne's *Holy Sonnets*', *ELH* 28 (1961), 137-47, and A. Raspa, 'Theology and Poetry in Donne's *Conclave*', *ELH* 32 (1965), 478-89.
- (32) T. S. Eliot, 'Thinking in Verse', *The Listener* 3 (12 Mar. 1930), 441-3.
- (33) St Ignatius, *Spiritual Exercises*, ed. cit., 22.
- (33) *Divine Poems*, 13.
- (34) St Ignatius, *Spiritual Exercises*, ed. cit., 27.
- (35) *Divine Poems*, 10.
- (36) *Divine Poems*, 57, 59, 60; see also Itrat Husain, *The Dogmatic and Mystical Theology of John Donne* (1938), 66-7.
- (37) *Divine Poems*, 18.
- (38) *Sermons* i, 200.
- (39) *Divine Poems*, 2, 60.
- (40) *Elegies*, 70.
- (41) Gosse ii, 78.
- (42) *Sermons* iii, 302-3.
- (43) *Divine Poems*, 51.
- (44) *Divine Poems*, 7.
- (45) Martz, op. cit., 132.
- (46) *Divine Poems*, 12-13.
- (47) *Divine Poems*, 11.
- (48) *Divine Poems*, 6.
- (49) Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (1971), 469-77.
- (50) Henry More, *Historia Provinciae Anglicanae Societatis Iesu* (1660), iv, 134.
- (51) On suicide see S. E. Sprott, *The English Debate on Suicide from Donne to Hume* (La Salle, Ill., 1961); A. Alvarez, *The Savage God* (1971); R. Wyrner, 'Suicide and Despair in the Jacobean Drama' (Oxford B. Litt. thesis 1976).
- (52) Marlowe, *Dr. Faustus* vi, lines 18-23.
- (53) *Biathanatos*, 17, 28.
- (54) *Divine Poems*, 8.
- (55) Bunyan, *Grace Abounding*, sections 84 and 104.
- (56) *Divine Poems*, 7.
- (57) For a brief summary of the Catholic and Protestant positions see T. M. Parker, *The English Reformation to 1558* (1950), 117-20.
- (58) *Divine Poems*, 11.
- (59) *Divine Poems*, 7, 13, 15.
- (60) *Divine Poems*, 14-15.
- (61) *Divine Poems*, 79.
- (62) *Elegies*, 77-8.